

## 新人研修

園長 児嶋 草次郎

みなさん、おはようございます。本日は石井記念友愛社に新しく入社された新人職員の皆さんに集まっていただきました。法人新人職員研修ということで、石井記念友愛社で働くにおいて一番大事なことを、学んでいただきます。私は理事長の児嶋と申します。よろしくお願い致します。私に与えられた時間は約1時間半、石井記念友愛社という社会福祉法人がどういう組織なのか、そして、どういう理念を掲げて事業を行っているか等を、パワーポイント使いながら説明させていただきます。

説明を始める前に皆さんに一言お礼を申し上げます。それぞれの人生において自分の大事な一時期、この石井記念友愛社という組織に所属していただきましてありがとうございます。どこの組織も最近はそのだと思いますが、石井記念友愛社にとって今最大の課題は人材の確保と言ってもよい。石井記念友愛社の組織全体で現在300人以上が働いてくださっていますが、その約1割の人たちがこうして新たに加わってくださったわけですね。動機は皆さんそれぞれだと思いますが石井記念友愛社という職場を選んでくださいましたことをお礼申し上げます。

さて、今日の話ですが、3本柱でお話をさせていただきます。

- 1、石井記念友愛社の事業は、人生支援事業だ。
- 2、石井記念友愛社で仕事をしていくにおいて、一番大切なものは、理念・方針である。
- 3、法律やマニュアルが人をつくるのではなく、文化が人をつくる。

まず、「石井記念友愛社の事業は、人生支援事業だ」について。一つの図を示します。コロナの感染者の推移みたいな成長曲線です。20歳頃が最高頂です。人生100年の誕生から始まって、乳児、幼児、小学生、中学生、高校、大学、社会人へ成長していき、60歳代頃から肉体も老化していき、70歳代80歳代90歳代と年々衰弱し、やがて死を迎えます。その変化をイメージ化したものです。他の動物に比べると、非常に未熟で生まれ落ち、緩やかに育ち、自立期（思春期）は、肉体的にも精神的にも一気に激しく成長し妊娠、出産に備えるというのが、霊長類学的とらえかたです。「たくさんの子供を産むために、人間は授乳期を縮め、続けて何度も出産できるような身体を作った。」「脳の成長を加速させねばならない幼児期は、体の成長を遅らせて脳に過大なエネルギーを送り込む。その結果、脳の成長が止まる思春期に体の成長が加速する時期が訪れる」と、霊長類学者の山極寿一さんは述べておられます。つまり、思春期に入る頃からヒトは急激に成長し、出産準備OKという時期を迎えるわけです。

もう一つヒトには大きな特徴があります。先日石井記念友愛園で飼っている牛が子供を産みました。生まれてすぐに子牛は立ち上ろうとしますし、やがて立ち上がり、母親のおっぱいに自ら近づき乳首を吸い始めます。弱肉強食の世の中で生きている野生動物の多くは、生き抜いていくために、生れ落ちてすぐ活動を自ら始めます。その力が本能の中に組み込まれているのです。

ところがヒトの場合は先ほども紹介しましたように非常に未熟な形でこの世に誕生します。

立ち上がることもできませんし、自分で乳首に近づくこともできません。つまり、すべてを母親に依存し、また生きていくための技術や知恵も後天的に学ばねば、自立はできません。そこで次のことが言えます。一番大事な乳幼児期から思春期にかけて、100年の人生を生き抜いていくための生活習慣、知恵、自律力、自立力、人格等を身につける。人類始まって以来、親（保護者）の保護のもと、繰返しその取り組みを行ってきた。子育て・子育て文化の伝承が子育てである。文化人類学的なとらえ方です。

牛や豚のように DNA の中に自立力が組みこまれているわけではないですから、育て方を間違えると大変なことになります。宗教哲学者の山折哲雄さんは次のように述べておられます。「人は放置すると、野生化、野獣化する。そうさせないために宗教や学校を作った」。なるほどと思います。「野生化、野獣化」とは野生動物たちに対して失礼な言葉（野生動物は食料として必要以上に他を殺しません）ですが、私だったら悪魔化と言います。理性を身につけた人間とはとても思えないような行動を取るヒトのことを表現していると、皆さんにも伝わると思います。

人生支援事業の説明をする前にヒトの特徴を、2点前提として説明させていただきましたので、頭の中に入れておいてください。

ここの約 30 人の新人職員の中には乳児院、保育園の職員もいますし、児童養護施設の職員もいますし、それ以外の施設の職員もいます。自分は、この人生支援事業の中のどの部分を担当し、その分野においての課題とは何なのかをまず自覚していただきたいと思います。それぞれの人の発達課題・人生課題に応じて、その役割使命が違うということです。

全く無防備な状態で生まれ落ちた赤ちゃんを無条件に受容し、愛情を注ぐ、そして安らかな雰囲気の中で授乳し保育する。それが乳児院や未満児保育園の職員の役割、使命です。しかし、先ほども話しましたように、それだけではヒトは人間にはなれないのです。三つ子の魂百までという言葉のように、三歳までに、人間として生きていくための基礎を作ってあげねばなりません。それは愛情に裏付けされた基本的な生活習慣の養成です。人間に対する信頼も必要ですし、規範力、自律力の基礎となるようなものも身につけさせていかねばなりません。小学校に上がるまで保育・養育はつづきます。

児童養護施設の職員の役割使命とは何か。先ほどの説明でもお分かりのように、人間の人生 100 年の中で一番リスクの高い時期は思春期です。ここにいる皆さんは、みんな若いですが（中年以上の方もいます）、自分の人生を振り返ってみてください。思春期の頃、誘惑に流されそうになった人もいるでしょう。もしかしたら、大きな失敗を経験している人もいるかもしれません。

先ほど説明しました。ヒトとしては、14.5 歳くらいになったら、もう出産準備 OK の状態です。本能的にオスは子孫を残すために攻撃的になるし、メスはオスを受入れよう受入れようとします。100 年くらい前までは、14.5 歳でもう結婚していた。本能に従順であった。石井十次も 16 歳で結婚しています。しかし、今は、20 歳すぎ、経済的にも精神的にも自立するまでその生殖活動を我慢させようとします。山折哲雄先生は「人は放置すると、野生化、野獣化する」と言いました。「放置する」とはどういう状態か。愛情を注がず基本的な生活習慣も身につけさせることなくネグレクトした状態です。そうすると、自律力、自己コントロール力が育たないので、思春期に入り、性的本能に翻弄されるようになる可能性大である。児童養護施設で性的問題が多い背景にはそのような根本的問題があるのかもしれない。

そういう思春期の子供たちの養育・教育を使命とする児童養護施設の職員には、それ相応の覚悟とエネルギーが必要です。誰にでもできる仕事ではありません。私も大学を卒業してすぐこの児童養護の世界に入りましたが、ある時覚悟を決めました。思春期の子ども達と交わること

をすべて中心にすえ、他はすべて捨てました。命をかけてこの仕事をやって来たと言ってもよい。35歳で結婚できたのは幸いでした。

障がい者施設や高齢者施設は、主に20歳以降の人格の確立した大人の人たちを対象とする仕事です。思春期の台風を相手にするような難しさはないにせよ、それ相応のむつかしさはあります。特に障がい者の方々は、ここに来るまでに、偏見にあったり色々辛い体験もして来られているので、心広く忍耐強く対応、支援していかねばなりません。

ここでようやく「人生支援事業」の説明に入ります。石井記念友愛社は、児童養護施設から始まって、保育園、乳児院、障がい者支援施設、高齢者施設と20以上の施設を抱えています。それぞれが勝手に個別に機能するのではなく、それらすべてが共生しあい包括し合って地域に貢献していく事業体であるということです。全体が台風のように渦巻き、人生の様々な課題を吸収しながら破戒ではなく新たなものをつくり出していくというイメージです。昭和20年、戦災孤児救済のために再スタートし、その後、地域のニーズに答えながら事業をやっていくうちにこうなったのです。対象は人ですけど、地域社会に対しては、保育や養護が人づくり、高齢者施設が福祉文化づくり、障がい者施設がモノづくりとして貢献していると位置付けています。

例えば保育園で働いている職員が、保育園という狭い空間の中だけで子供の保育を考えるのではなく、100年という人間の人生の中で、今自分はどの部分を担当しているのか、そういう発想で保育をしていただきたいと思います。自立し長い人生を生きぬいていくために、今、何が必要なかと考えながら保育をしなければならない。今年度から、石井記念友愛園の幼児さんが移転新築した石井記念のゆり幼児園に通えるようになりました。長年の宿願でした。幼児さんと言えども友愛園に来るまでに色んなマイナスの体験をして来ている子もいます。友愛園と幼児園の職員が情報を共有し合って、その子供の人生を考えながら保育を行っていかねばなりません。

2、石井記念友愛社で一番大切なものは理念・方針である。

石井記念友愛社の理念は、石井十次の遺言と言ってよい「天は父なり 人は同胞なれば 互いに信じ相愛し合うべきこと」です。すばらしい言葉だと思います。石井十次48歳の人生の思い願ひ全てがこの中に凝縮されています。私なりに解釈するならば、以下のような意味になります。「天には父のような存在がいる。恐れ敬え。人はみな天のもとでは兄弟みたいなものであるので、互いに信じ合い愛し合い、助け合っていこうじゃないか!」。日本全国に多くの社会福祉法人があると思いますが、このようなすばらしい理念を掲げることができることを幸せに思いますし、誇りにも思います。この理念のために命をかけてもよいというような気分にもなれます。

ここから、暗い話になります。この研修会に出席するにおいて、「友愛通信」の先々月と先月号を持参するようお願いしましたが、皆さんに持って来ましたが。4月号(337号)の中で、相模原市のやまゆり園事件について触れています。2016年知的障害者施設「津久井やまゆり園」において、入所者19人を殺害(職員2人を含む26人重軽傷)した、元施設職員植松被告(30歳)に、3月16日死刑判決が下された事件について書いています。

新聞等の報道によりますと、小学生の時の作文に「障害者はいらない」と書いていたそうです。それはおそらく回りの大人の影響だろう。もしかしたら親かもしれない。そういうことってというのはあり得るのかもしれない。しかし、問題はその後です。学校教育は彼のそういう考えを変えることができなかつた。そして、問題は根本的そういう価値観を持つ男が、障害者施設に職員として入って来たということです。これはナゾです。家の近くにそういう施設があり、

あまり気はすすまないけど、お金が稼げるので、とりあえず入った、ということなのかもしれません。

彼も、入職して、ここにいるみなさんと同じように研修は受けたはずです。その施設の理念についても学んだでしょうし、障がい者の人権擁護についても指導を受けたはずです。しかし、彼は言葉としては理解したかもしれないけど、感性の次元で共鳴はしなかった。本人にとっても、施設側にとっても不幸の始まりです。

今から石井記念友愛社の理念、方針、そして到達目標「友愛の地域社会のつくり」について説明させていただきますけれど、もし、この中に、私はどうしても共鳴できない、共有する気になれないという人がおられたら、早く辞めていただいた方がよいかもしい。

もし彼が「天は父なり」という言葉に出会っていたら、その感性は変っていたかもしれない。石井十次の場合、キリスト教の天ですけれども、仏教でもいい、神道でも別の宗教でもよい。人間を超越した存在がおられるという感性は、必要です。そうしないと人間は傲慢（ごうまん）になってしまう。特に福祉には必要です。そういう感性は子供たちにも育てていかねばなりません。今度、のゆり幼稚園の園庭の北東の場所（鬼門）に、小さな社を作りました。

今から4百数十万前、あの場所で薩摩の島津軍（島津義久）と大阪の豊臣秀吉軍と合わせて10万以上が互いに戦いました。九州の天下分け目の戦い（根白坂合戦）であり、豊臣方が勝って九州を平定しました。その激戦で多くの若者が亡くなったのに、今までその慰霊碑がこの地になかったのです。石井十次は、その地に理想郷を作ることで慰霊になると考えたのかもしれませんが、私は土着の人間ですので、やはり、形になるものがほしかった。

以下、方針の自然主義、家族主義、友愛主義、自律主義、そして到達目標の友愛の地域社会つくりについて説明します（略）

### 3、法律やマスコミが人をつくるのではなく、文化が人をつくる。

私たちは石井十次の名前を掲げて仕事をさせていただいています。石井記念というのは単に石井十次を顕彰するだけではなく、石井十次を初め当時の職員・子供たちの作りあげた教育・福祉文化から学びなおすという意味も含まれます。先ほど、「子育て・子育て文化の伝承が子育てである」と言いました。他の動物と違って全く未熟で無防備な状態で生まれ落ちた子供を愛情で包みながら育てていかねばならないのです。人類が誕生して20万年くらいの年月がたっているようですが、繰り返し繰り返し子育てを重ねて来て今があるわけで、その過程において、それぞれに子育て・子育て文化として結晶し、伝承されて来ています。思いつきでは子育てはできないのです。そんなことをしていたら、先ほどの山折先生が言われるように、「野生化、野獣化」、私に言わせれば悪魔化していきます。やまゆり園で19人を殺した男は、その一人かもしれません。皆さんにお願いしたいのは、先人たちからしっかり学んでほしいということです。個人主義の時代になって、何らかの資格を取ったら、それでオールマイティなのだと思ってしまう人もいますが、人をつくる仕事は単純ではありません。石井十次、それに職員、子ども達の作った教育・福祉文化からも学んでいただきたいと思います。時間の関係で、石井十次青春物語、「挫折からの立ち直り原則」について説明させていただきます。

この研修館の北側の壁に掲示してある12枚のパネルにそって説明していきます。（略）

これらの物語から私は、「挫折からの立ち直り原則」としてまとめています。

- ①親（それに代わる人）の愛情
- ②志教育
- ③出会いの準備

石井十次は突然変異的にこの世に出現し活躍したわけではありません。石井十次の両親が偉かったのです。彼の幼少期から思春期にかけて、その三つを親が準備していったから、石井十次は思春期の壁を乗り越えることができたのです。

この方法論を児童養護施設でも実践しなければならない。児童養護施設の養育を評価する際一つの基準となるのが大学進学率でしょう。一般家庭の大学進学率が52%であるのに比べ、児童養護施設は全国平均で16%とあまりに低い。これでは児童養護施設の子供たちのプライドも誇りも育たない。石井記念友愛園の過去6年間の大学進学率は54%です。色々問題もあるのですが、「挫折からの立ち直り3原則」が、いくらかここで生かしているのではないかとも思います。

これで私の話を終わります。これから皆さん共生し合い包括し合って、互いの役割使命をはたすべくがんばってください。